

★今週の聖句

「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」 マタイによる福音書 21:9

★ねらい

- ・待降節の始まりにあたって、心の中にイエス様をお迎えする準備をする。

★説教作成のヒント

- ・ルーテル教会の日課では、この箇所は「待降節第1主日」と「棕櫚の主日（四旬節最終主日）」、1年間に2回読まれる。棕櫚の主日に読まれる場合には、ロバや、その先に待つ受難に焦点が当てられることが多いので、この待降節に読まれるときには「王としてやってこられるキリスト」に焦点を置いてよいのではないだろうか。
- ・イエスは、王として、わたしたちの生の現実の只中に入ってこられる。アドベントは、キリストを、私たちのいのちの主人として受け入れる備えをするときである。

★豆知識

- ・「アドベント（待降節）」という言葉は、「到来」を意味するラテン語からきている。「待つ」側面が強調されやすいが、本来、神から到来する恵みの方に重きを置いた言葉である。
- ・「エルサレム」は、聖書の民にとっては宗教的な中心地、神殿を有する「神の都」である。そこに「神の子」であるイエスが訪れるということは、その都の本当の王、本当の主人が来られたことを意味するのである。その主人を、人々は究極的には受け入れることができなかつたことも含めて、「イエスを受け入れる」とはどういうことかを考えたい。

★説教

今日から、待降節です。教会は少し雰囲気が変わりましたし、ろうそくが4本（教会によっては4本+真ん中の一本）立てられた、特別の飾りもありますね。そのうち1本に、今日は火をともします。これから毎週、一本ずつ火のついたろうそくが増えていきます。全部のろうそくに火がついたら、皆が楽しみにしているクリスマスです。これからみんなで、クリスマスまでカウントダウンをしていきましょう。

クリスマスまでに、皆さんはどんな準備をしていきますか。クリスマスツリーを飾る？プレゼントの準備？クリスマスケーキの注文？楽しみに待つことは、とても大切なことですね。

もうひとつ、忘れてはいけない準備があります。私たちの心に、イエス様をお迎えする準備をすることです。今日読んでいただいた聖書では、イエスさまが、小さなロバの子にまたがって、エルサレムという町に入っていられましたね。そして大勢の人が、イエス様が来られるのを喜んでお迎えしました。わたしたちも同じように、イエス様をお迎えする準備をしましょう。でも、どうやって準備をしたらいいのでしょうか。そんなことを言っても、イエス様はもう2000年前に生まれていらっしゃるじゃないか、という人もいるかもしれませんね。

わたしたちがお祝いするイエス様のお誕生は、確かに 2000 年前に起こった出来事です。でもそれだけではなくて、いま、わたしたちがクリスマスをお祝いすることは、わたしたちの心の中に、イエス様に生まれていただく、ということでもあるのですよ。

ある人は、自分の心の中に、王様が座るような立派な王座があるのを想像しましょう、と言いました。それは、自分の心の王様が座る王座です。だいたい、自分の心の王様は自分ですから、その王座には自分が座っています。そして、自分がしたいようにします。もちろんよいときもありますけれど、ときどきわがままを言ったりもします。ときどき、そこに悪い心が座ります。そうすると、誰かに意地悪をしてしまったり、人を悲しませるようなことをしてしまったりします。

イエス様を迎える準備とは、その王座にイエス様に座っていただくように場所をつくる、ということです。本当なら自分の王様は自分でいたいのですけど、それをちょっと譲って、イエス様に座っていただく。イエス様に、わたしの心の王様になっていただくように、イエス様をお迎えするのです。これから 4 週間、わたしたちの心の中に、イエス様に生まれていただく準備をしていきましょう。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□ 8 2 番

□ 改訂 6 5 番

やってみよう

☆簡単アドベントカレンダーをつくろう。

画用紙にツリーの絵を描き、○印に

1～24の数字を書き入れよう。

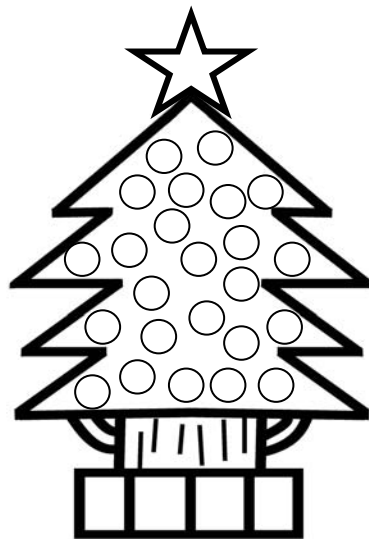
100円ショップにある、

○シール（いろんな色があるよ）を

24コ分持ち帰り、

毎日1枚ずつ数字の日に貼っていこう。

簡単アドベントカレンダーのできあがり！！



話してみよう

- ・イスラエルの人たちは、イエス様にどんなイメージを持っていたか考えてみよう。
- ・「心にイエス様をお迎えする」とはどういうことでしょう。
- ・あなたは、イエス様をお迎えするために、どんな準備をしたらよいと思いますか。

★今週の聖句

「その方は、聖霊と火であなたがたに洗礼をお授けになる。」

マタイによる福音書 3:11

★ねらい

・主の到来を迎えるということは、神の言葉と真剣に向かい合う、ということでもある。アドベントは、神の前の自分の姿を見つめなおすときなのである。

★説教作成のヒント

・キリストを私たちの中に迎えるということは、神様からの「立ち帰れ！」というメッセージを受け入れることである。神に立ち帰ろうとするとき、わたしたちは神の裁きの前に、取り繕わない自分の姿をさらけ出すことになる。しかしそこで、わたしたちは罪人を憐れみ、救い出してくださるためにこの世へとやってこられた神の恵みと出会うことができるのである。

★豆知識

・「荒れ野」は旧約聖書の時代から、神と出会う場所だとされてきた。荒れ野は旧約聖書の古代イスラエルの民が、モーセによるエジプト脱出の際に40年間さまよった場所でもある。その間、イスラエルは神に何度も反抗し、罰を与えられることもあったが、神はイスラエルが約束の土地に入るまで、離れることなく導き続けた。

★説教

先週は、クリスマスの前は、イエス様を心の中にお迎えする準備をするときなんだよ、というお話をしました。今日は、イエス様がわたしたちのところにやってきてくださるときに、私たちの心にどういうことが起こるのか、というお話です。

ヨハネさんという人は、イエス様がみんなの前に姿を現す前に、「もうすぐ救い主がやってくるから、お迎えする準備をしなさい！」と呼びかけた人でした。その人が、もうすぐ来られるイエス様のことを、こう言いました。「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼を授ける人だよ」と。「聖霊」と「火」ということばが出てきましたね。「聖霊」とはわたしたちに働く、神さまの力です。「火」というのは、少し怖い感じもしますね。

火は便利なものですが、触るとやけどをしてしまったり、物を燃やしてしまったり、使うときに気をつけなければならない、少し恐ろしいものでもあります。「火」というのは物を燃やしつくしてしまうところから、悪いものを滅ぼしたり、よくないものをきよめたりする働きがあるとも言われていました。

少し怖いですね。やけどしてしまいそうです。けれども、イエス様をお迎えするということは、イエス様の火によって、わたしたちの心をきれいにお掃除していただく、という意味でもあるのです。聖書に書かれていることが、少し自分にとっては厳しいな、と思うことはありませんか。もちろん神

さまは、優しい言葉や人を励ます言葉もたくさんくださいます。でもたとえば「あなたの敵を愛しなさい」とか「兄弟に『ばか』とってはいけない」といったイエス様の言葉を聞くと、ときどき、ギクッとすることがあります。ああ昨日、あの子に意地悪しちゃったなあとか、弟に「ばか」って言っちゃってるなあ、とか、そんな自分のことを思い出すからです。そんなふうに、聖書の言葉は、わたしたちを励ますだけではなくて、ときどき心にぐさっと突き刺さったりもするんですよね。神様の言葉を聞くと、わたしたちは自分の心の中に、冷たかったり、ときどき意地悪だったり、あんまり知りたくない自分の姿を見つけてしまいます。

しかし、そのわたしたちのためにこそ、イエス様はこの世界に救い主として、生まれてきてくださったのです。イエス様は家畜のえさ箱である飼い葉おけの中に、生まれてくださったことはみんな、よく知っていると思います。飼い葉おけは赤ちゃん用のベッドとは違いますから、柔らかくもないし、暖かくもないし、清潔でもなかったでしょう。でもそのきれいではない、冷たい、固い飼い葉おけの中に、イエス様は生まれてくださいました。この飼い葉おけを、私たちの心だと考えてみましょう。私たちの心は、冷たかったり、きれいではなかったりして、イエス様をお迎えするのにふさわしいところではありません。しかし、そんなわたしたちと一緒に生きるために、イエス様はわたしたちのところに生まれてきてくださったのです。私たちの心の飼い葉おけに、喜んでイエス様をお迎えしたいですね。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

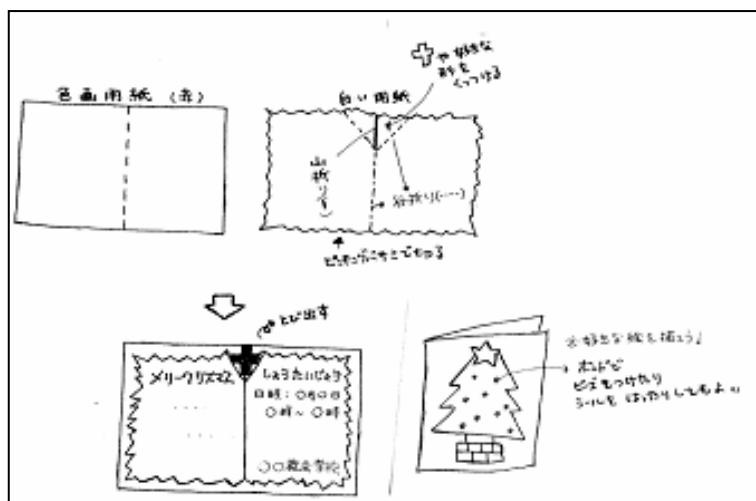
□ 5 7 番

□ 改訂 6 5 番

やってみよう

☆CS クリスマス会の招待状を作って、お友達にプレゼントしよう。

(例)



話してみよう

- ・「悔い改める」とは、どういうことでしょう。
- ・「悔い改め」はルーテル教会の礼拝の中では、毎週、罪の告白「神さまごめんなさい」と言いますね。「悔い改め」は、私たちにとってなぜ大切なのでしょうか。
- ・神さまと私たちをつなぐ道をまっすぐに整えて、イエス様のお生まれを待つには、どうしたらよいでしょう。

★今週の聖句

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」
マタイによる福音書 1:21

★ねらい

・ヨセフがマリアを受け入れるには葛藤があった。その葛藤の中で、神さまがヨセフとマリアに道を開いてくださったこと、そこから救いの歴史を作ろうとしてくださったことを知る。

★説教作成のヒント

- ・ヨセフは最初、マリアとの縁を切ろうとしたが、それはヨセフにとって、マリアを石打の刑にさせないための苦肉の策であった。人の目から見れば、マリアの妊娠はヨセフに対する裏切りである。
- ・神のお告げによって、ヨセフはマリアを受け入れることを決意する。マリアを受け入れることはヨセフにとってもマリアにとっても、茨の道を歩むことだったはずである。しかし、ヨセフが、愛と、人知を超えて働いてくださる神への信頼をもってマリアと子を受け入れることを決意したとき、その現実の中で神の救いの計画が実現していく。
- ・神の民イスラエルは、神に対する背きの罪によって国を失い、長い間他国の支配下に置かれていた。自分たちを罪から解放し、神との関係を回復してくれる救い主の登場は、ユダヤの人々の長年の悲願であった。ヨセフも救い主の登場を強く待ち望んでいただろうが、まさか自分がその誕生に関わるなどとは、思ってもいなかったに違いない。神は、不安や恐れ、戸惑いを抱えた小さなカップルを、ご自分の大きな恵みを全世界に示すための、救いの計画のために用いられた。

★豆知識

- ・当時、婚約・結婚をしていながら他の男性と関係を持った女性は、人々の間に引き出され、石を投げられ撃ち殺されなければならなかった。妊娠がまだ知られていないうちにこっそり離縁をし、マリアがどこかよそのところに行けば、シングルマザーとしての苦労はあるだろうが、死に値する罪には問われないのである。
- ・夢は、自分でコントロールすることが難しいところから、神が見せてくださるもの、神から人へのダイレクトな働きかけだと考えられていた。ここでのヨセフへのメッセージが「夢」であったことは、葛藤するヨセフに、人の思いを超えたところから、神が打開の道を開いてくださったことを意味する。

★説教

アドベント・クランツに3本火がついて、クリスマスが近づいてきました。早くイエス様をお迎えして、みんなでお祝いをして、喜びたいですね。

いちばんはじめのクリスマスのはじめのときは、どうだったのでしょうか。マリアさんのお腹の中に赤ちゃんがいるとわかったとき、ヨセフさんはどんなふうに喜んだのでしょうか。実はそのとき、ヨセフさんは悩んでいました。自分と結婚するはずのマリアさんのお腹に、自分の子供ではない赤ちゃんがいるのです。マリアさんは、自分以外の男の人と浮気をしたんだらうか。ちょっと難しいかもしれないけれども、皆さんだったらどうしますか。わたしだったら腹を立てて、みんなの前でマリアさんを怒らせてしまうかもしれません。ヨセフさんにはみんなの前で、マリアさんを裁判にかけて、死刑にすることもできました。むしろ、その時代のルールだと、ヨセフさんはそうしなければならなかったのです。

ヨセフさんは、悩みました。きっと、マリアさんに対して怒る気持ちもあったでしょう。けれどもヨセフさんは、だからといってマリアさんにつらい思いをさせたくありませんでした。ですからヨセフさんは、周りの人にマリアさんに赤ちゃんがいることがわかってしまう前に、マリアさんとの結婚をなかったことにすることで、ヨセフ以外の人と浮気をしたと責められることから、マリアさんを守ろうとしたのです。

こんなふうに、世界で最初のクリスマスは、決して幸せとはいえない状況で始まったのです。でも、そんなふうに悩んで苦しんで、でもマリアさんをできるだけ傷つけない方法を選ぼうとした、優しいヨセフさんに、なんと夢の中に天使があらわれて、こう言ったのです。

「ヨセフさん、恐れずに、そのままマリアさんと結婚しなさい。神様の力によって、マリアさんは赤ちゃんを身ごもったんですよ。マリアさんのお腹の中の赤ちゃんは、神さまからのすばらしい贈り物、すべての人を苦しみから救う、救い主なんですよ。」

信じられない、不思議なメッセージですね。でもヨセフさんは、この天使の言葉から元気をいただきました。そして、マリアさんとお腹のイエス様の家族になる決心をしたのです。

ですから、ヨセフさんとイエス様は、実は血がつながっていません。しかしヨセフさんはこうやって、相手を大切にしたいと思う気持ちと、神様が一緒にいてくださるから大丈夫だという信仰、この二つによって、マリアさんとイエス様の家族になったのです。

「神さまと一緒にいてくださるから大丈夫」「神がわれわれと共におられる」このことを「インマヌエル」といいます。ヨセフさんとマリアさんが結婚するにはたくさんの心配や不安がありましたけれど、「インマヌエル」の神さまが、その真ん中で助けてくださいました。そして生まれてくるイエス様は、ヨセフさんとマリアさんだけではなく、すべての人の救い主となられたのです。心配を抱えたふたりのカップルをとおして、神さまはとつてもとつても大きくてすばらしいことをなさいました。これが「わたしたちと一緒にいてくださる」、インマヌエルの神さまのお働きです。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□ 18番

□ 改訂65番

やってみよう

☆名前ビンゴをやってみよう。

- ・真ん中は、全員イエスさまと書きます。（フリー）
- ・あと24のマスに、メンバーの名前や聖書に出てくる人の名前を書きましょう。
- ・あらかじめ、メンバーや聖書に出てくる人の名前を書いて、箱の中に入れて準備しておきます。
- ・ビンゴ大会のスタート！！

		イエス さま		

話してみよう

- ・マリアもヨセフもみつかいの言葉にとつても驚いたでしょう。でも、2人とも神さまのみことばを受け入れましたね。この時のマリアとヨセフの気持ちを考えてみましょう。

★今週の聖句

「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」

ルカによる福音書 1:49

★説教作成のヒント

- ・今日の聖書箇所全体は「マニフィカート」（ラテン語で「あがめよ」と呼ばれる賛歌である。イエスの母マリアには優しく穏やかなイメージがついているが、この賛歌の中でマリアは、むしろたいへん力強く堂々と、虐げられた人々の救いを歌い上げている。
- ・直前の26-38, 39-45節も参照。天使による受胎告知の後、マリアが親類エリサベトのところへ行き、天使が自分への受胎告知と共に告げたエリサベトの妊娠を確かめる。マリアは老齢であったエリサベトの妊娠に触れたことで、「神にできないことは何一つない」という天使のお告げを改めてその身に感じ、喜びの歌を歌ったのである。
- ・「はしため」という言葉は身分の低い奴隷女、という意味を持つ（「はしため（卑女）」「賤の女」は、女性の社会的地位に対する蔑視表現でもあるので、注意が必要）。実際にマリアが奴隷の身分であったわけではない。しかし「はしため」という言葉は、神の偉大さに対してマリアが自分自身をへりくだらせた表現であると共に、当時の権力・特権的階級に対してマリアは何の力も持たない非力な娘であったこと、そのマリアを通して神は偉大な恵みのわざを行われるのだ、という弱い立場の人々に対する救いの宣言でもある。

★ 豆知識

- ・「聖母マリア」というと、すでに母親として完成した、優しく穏やかで慈愛に満ちたイメージを抱くかもしれない。しかしおそらくこのときのマリアは、ようやく結婚適齢期に差し掛かったばかり、13~15歳くらいの少女である。賛歌の内容は、イエスによって実現する神の救いの出来事を歌っているが、その出来事は決して力強い英雄をとおしてではなく、幼い少女と無力な赤子の姿でキリストが世に下ってこられることによって実現していくのである。

★ 説教

アドベントクランツの周りの4本のろうそくにすべて火がつけました。後は、真ん中のろうそくに火がともるだけです。やっと、楽しみにしていたクリスマス、イエス様のお誕生をお祝いすることができます。

さて、イエス様がお腹の中に来たとき、マリアさんは何歳くらいだったと思いますか。みんなのお母さんくらい？〇〇先生くらい？実は、13歳から15歳くらいだったと言われているんです。中学生のお姉さんくらいですね。マリアさんはみんなのお姉さんくらい、子どもとおとなの間くらいの子だったんです。

そんなマリアさんでしたから、はじめ、天使から「あなたは救い主を生みますよ、その子にイエスと名づけなさい」といわれたとき、マリアさんはとても驚いたんです。結婚していないのに子どもが生まれるというのも不思議でしたし、自分みたいな力の弱い女の子が、救い主のお母さんになるなんて、できるのかしら、とも思ったのでしょね。

そんなマリアさんが、イエス様のお母さんになる覚悟を決めることができたのは、親戚のエリサベ

トさんのところに会いに行ってからでした。天使はマリアさんにこうも言っていたのです。「あなたの親戚のエリサベトにも、子どもを生まないまま年を取っているけれども、男の子が生まれますよ。子どもがほしくても生まれなくて、ずっと悲しい思いをしていた人だけれど、もうだめだと思っていたエリサベトさんにも、神さまは大きな恵みを下さったんですよ」そして、エリサベトさんのところについて、天使が言ったことが本当だったことを確かめたマリアさんが、喜んで歌ったのが、今日読まれた聖書のところです。

マリアさんは、天使が言ったことが本当だったと知って、「自分は小さなものだけれども、その自分に神さまが大きなことをしてくださった！」と喜んで歌いました。小さくて、あまり力も持っていないマリアさんを神さまは選んで、イエス様のお母さんとしてくださった。神さまが小さなマリアさんを選ばれたのは、マリアさんが特別美しかったり、特別ないいことをした人だったりしたからではなく、この小さなマリアさんをとおして、「貧しかったり、飢えていたり、力がなくて苦しんでいる人たちに、神さまは特に大切にしてください、大きな恵みをくださるんだよ」というしるしを示されるためでした。

「主われを愛す」という歌がありますね。「主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも、おそれはあらず…」これはアイスクリームの歌ではなく、「神さまがわたしを愛してくださるから、わたしの力は弱いけれども、怖くはありません！」という意味の歌です。イエス様は、小さな赤ちゃんの姿で生まれてきてくださいました。その小さな、周りの人の助けがなくては何もできない赤ちゃんイエス様の姿の中に、大きな大きな神様の恵みが詰まっているのです。どんなに自分が小さく、弱く思えるときでも、神さまがいてくださるから、大丈夫！クリスマスは、そのことを喜ぶお祭りでもあります。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

26番

改訂70番

やってみよう

☆クリスマスのヒミツのみことばを探そう！

- ①イ・ン・マ・ヌ・エ・ルを一文字ずつ書いたカードを教会のあちこちに隠しておく。
- ②6枚のカードを探しだして、言葉にしよう。（聖書マタイ1：23）
- ③インマヌエルの意味を聖書から調べよう

※1枚の厚紙に文字を書いて、パズルのようにバラバラに切ってピースにしてもおもしろい。

話してみよう

「イエス様は、_____さんのためにお生まれになりました。」にメンバーの名前をそれぞれ入れて、みんなで言いましょう。どんな気持ちがするか、話してみましよう。

★今週の聖句

「起きて、子どもとその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。」

マタイによる福音書 2:20

★ねらい

- ・いのちを殺そうとする力に勝っていく、神の愛の働きを知る。

★説教作成のヒント

- ・マタイ福音書の中で、ヨセフには一言のせりふも与えられていない。しかしヨセフはマリアとお腹のイエスを受け入れ、またイエスが生まれた後は、妻と子をヘロデの手から守ろうと行動する。一見目立たないヨセフの行動を通して、イエスの命は守られていく。
- ・いのちを奪おうとする大きな力がある。そしてそれに比べると、いのちを守ろうとする働きは、小さなものに思える。しかし一見無力に見える、小さく見える愛の働きの中でこそ、神の救いの出来事は確かに前進していくのである。
- ・「主が預言者を通して語られたことが実現するためであった」（15、23）という言葉が繰り返し出てくるが、嬰兒虐殺という悲劇について、「これも神の御心であった」と簡単に結論付けるようなことは避けなければならない。たとえイエスは逃れたとしても、子を奪われた母親の嘆きは消えない。しかし、そのどうしようもない悲しみのどん底の出来事の中からでも、神は新しいことを起こしてください、そこに希望を見出すことは可能だろう。

★豆知識

- ・聖書に記されているようなヘロデによる虐殺が、実際に起こったという記録は見つかっていない。しかしヘロデは即位当初はよい為政者であったようだが、自身が純血のユダヤ人ではないというコンプレックスから、周囲への猜疑心を募らせ、自分の妻や子供ですら殺害していったという。救い主が現れるという知らせを聞いて、このような凶行に走ったとしても不思議な話ではない。

★説教

わたしたちはつい先日、クリスマスをお祝いしました。イエス様のお誕生を、みんなで喜びました。聖書の中でも、マリアさんやヨセフさん、羊飼、天使たち、東の国の博士さんなど、みんながイエス様のお誕生を喜びました。

けれども、イエス様を拝みにきた人たちが皆帰ってしまったころ、ヨセフさんが不思議な夢を見るのです。「起きて、マリアさんと赤ちゃんを連れて、エジプトに逃げなさい。」そのときの王様であったヘロデ王が、イエス様のいのちを奪うために、ベツレヘムに住んでいる赤ちゃんをみんな殺してしまえ、という命令を出したのです。

どうして、ヘロデ王はそのような命令を出したのでしょうか。ヘロデ王は、「救い主になる方が、お生まれになろうとしています」と聞いたときに、「その生まれてくる赤ん坊が救い主なら、大きくなって、自分を倒すかもしれない」と、心配になってしまったのです。自分の王様としての力を失うの

が怖くなってしまい、ヘロデはそのような命令を出したのです。

不安に思う気持ちや、疑う気持ち。そういった気持ちは、私たちの心の中にもあります。それがどんどん大きくなっていくと、人と人では、それはけんかになってしまいますし、国と国だと戦争になってしまったりもします。不安や疑い、恨みの力はときどきとても大きくて、わたしたちにはどうにもできないように思えるときもあります。

けれども、ここでヘロデの力は、イエス様のいのちを奪うことはできませんでした。神様は、イエス様を殺そうとするヘロデではなくて、ヨセフの味方になって、ヨセフとマリア、赤ちゃんのイエス様をエジプトへと逃がしてくださったのです。王さまの方が、ヨセフさんよりも大きな力を持っています。王様はその力でイエス様を殺そうとしました。しかし神さまはここで、生まれたばかりの赤ちゃんとマリアさんを守ろうとするヨセフさんの小さな働きを、助けてくださったのです。

わたしたちは、戦争や事件のニュースを聞いて、心が暗くなることがあります。もちろんインドのマザーテレサのように人を助けるために働く人たちのこともわたしたちは知っていますが、戦争などの大きな力の前では、それらの働きは、小さく、無力に思えてしまうこともしょっちゅうです。けれども聖書はわたしたちに、たとえ小さな力に見えても、いのちを守ろうとする愛の働きが、世の中で何よりも強いのだ、わたしたちが誰かを守ったり、誰かに優しくしたり、大切にしようとするときに、神さまは必ずその働きを助けてくださるのだ、ということを教えてくれています。わたしたちも、あきらめないで、小さな働きを積み重ねていきたいとおもいます。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

97番

改訂18番

やってみよう

☆「神さま、ありがとう！！」寄せ書きをしよう。

1年を振り返り、神さまに守られたなどと思うことなど、感謝の気持ちを色紙に書いて、寄せ書きをしましょう。

話してみよう

- ・ヨセフは、神さまの言葉に従いましたね。どうしてだと思えますか。また、もし、神さまの言葉に従わなかったら、ヨセフ達はどうなっていたでしょう。
- ・あなたは、神さまにすべての信頼をおいて生きることができますか？それは、どんな人生になるでしょう？話してみよう。

★今週の聖句

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」	ルカによる福音書 2:11
--	---------------

★ねらい

・クリスマスは、喜びの祭りである。その喜びはまず、過酷な状況で野宿をする羊飼いたちに告げられた。その羊飼いたちに語られた「あなたたちのために」というメッセージについて、思いをめぐらせたい。

★説教作成のヒント

・ルカはイエスの誕生が、いつ、どこで起こったことであるのかを、当時のローマの支配体制を具体的に挙げることで語る。これは、イエスの誕生が絵空事ではなく、具体的な人間の現実の命のただなかで起こった出来事であること、人間の歴史の中に、神の恵みが入り込んでくださったことを意味する。

★豆知識

- ・実際にイエスが生まれた日付については、聖書に書かれていない。西方教会でクリスマスを12月25日に祝うようになったのは紀元300年頃のことであり、ローマの冬至の祭り結びついたりと言われる。「後付けの誕生日」といってしまえばそれまでだが、いちばん日が短くなり、気が滅入りがちなこの季節に、世の光であるキリストのお生まれを祝うようになったこと、そこにはやはり初期のキリスト教会の信仰が現れているのだろう。
- ・ヨセフとマリアが泊まったとされる当時の家畜小屋は、宿屋の裏手に造られた岩屋であつたらしい。イエス誕生の「聖誕の岩屋」と語り伝えられている場所が、現在のベツレヘムの聖誕教会の中にある。

★説教

クリスマス、おめでとうございます。イエス様がお生まれになったユダヤの国では、一日の始まりは前の日の夕暮れから始まりました。だから、クリスマスイブには、もう「クリスマスおめでとう」と挨拶をしてもいいのですよ。

ヨセフさんとマリアさんは、長い長い旅をして、ベツレヘムについたとき、宿屋に泊まる場所がなかったので、動物小屋に泊まり、そこでイエス様はお生まれになりました。生まれたばかりのイエス様は、動物のえさ箱である飼料おけの中に寝かされました。ヨセフさんとマリアさんは生まれてくるイエス様のために準備をしたでしょうけど、それでもきっと、動物小屋は暗くてくさかったことでしょう。そして、昔の飼料おけは石でできたものでしたから、きっと冷たくて固かったことでしょう。そういうところで赤ちゃんを産むということは、今のように病院などの清潔なところで赤ちゃんを産むことよりもたいへんで、危険をとまなうことでした。本当だったら、王様の宮殿のようなところに生まれてくる方が、イエス様にとっては安全だったはずなのに。しかし神さまは、王様ではなく、

マリアさんとヨセフさんをイエス様の両親として選び、お生まれになる場所として動物小屋を選びました。イエス様が生まれるときに、神さまは大きな冒険をなさったのです。

そして、イエス様が生まれた場所が動物小屋だったからこそ、イエス様に会いに来ることができた人たちがいました。イエス様をいちばんはじめに拝みにきたのは、野原で野宿をしながら羊の番をしていた、羊飼いたちでした。羊飼いは、たいへんな仕事です。一晩中交代で、羊を狼などの危険な動物から守らなければいけませんし、羊が群れからはぐれないように注意しながら、野原へと連れて行ったりもしなければなりません。身分が高い仕事ではありませんし、みんなが仕事を休んで礼拝をする日にも、羊のお世話を休むわけにはいきませんでしたから、周りの人たちの中には「羊飼いは決まったときに神さまを礼拝しない、ふまじめな生活をする人たちだ」と羊飼いのことをよく言わない人たちもありました。

しかし、天使がイエス様のお生まれをいちばんに知らせたのは、その羊飼いさんだったのです。天使はこう言いました。「今日、ダビデの町で『あなたがたのために』救い主がお生まれになった」。その赤ちゃんは布にくるまれて飼い葉おけに眠っている、とも天使は言いました。あなたたちのために、救い主が生まれたよ。お生まれになった救い主イエス様は、厳重な警備で守られた王様の宮殿などではなく、あなたがたが今すぐ拝みにいくことができる、動物小屋の飼い葉おけの中に眠っておられるよ。神さまは、他でもないあなたたちのために、飼い葉おけの中に、イエス様を送ってくださったんだよ。……えっ、「ふまじめだ」って言われる俺たちのためにだって？ しかも、飼い葉おけの中にだって？ 羊飼いたちは驚いて、ベツレヘムに向かいました。そこで天使が言ったとおり、イエス様にお会いして、天使が言ったことが本当だったと知ったのです。

「あなたがたのために」天使が語ったこの言葉が、とても大切なことです。イエス様は、わたしたちのところに生まれてきてくださいました。しかも世界の隅っこともいえる動物小屋の飼い葉おけの中に、生まれてくださいました。王様の宮殿や立派なお屋敷でなく、動物小屋でイエス様がお生まれになったのは、世界の隅っこで悲しい思いをしている人、さびしい思いをしている人、大変な思いをしている人たちが誰でも、イエス様に会いに来ることができるようにでした。そのために、イエス様は、神様のところからわたしたちのところへ、やってきてくださったのです。

わたしたちも、イエス様のお生まれをお祝いしましょう。また、いまさびしい思いをしている人たち、悲しい思いをしている人たちの中に、イエス様が訪れてくださって、クリスマスの喜びを与えてくださるように、神様にお願いしましょうね。クリスマスおめでとう！

★今週の聖句

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」

ヨハネによる福音書 1:14

★ねらい

・ヨハネ1章は、やや難解ではあるが、テキストそのものの私たちの心に訴えてくる力はたいへん強い。わたしたち、弱さを抱えた人間の現実の中に、神の言であるキリストが宿ってくださった。このクリスマスの喜びの本質を、できるだけ子どもたちの現実在即して伝えるようにしたい。

★説教作成のヒント

・「言」と訳された言葉は、ロゴスというギリシア語である。これはギリシアでは「言語」という意味の他にこの宇宙を貫く摂理を指し、神そのものとも同一視される。ヨハネは、そのロゴスが人格を持って、私たちの間に宿られたという。神のロゴスであるイエスが、わたしたちと共に生きるために、私たちの間に宿ってくださった。この方のいのちの中に、神の輝きが現れている。これはヨハネ全体を貫くメッセージである。

★豆知識

・現存する最古の日本語訳聖書であるギュツラフ訳のヨハネ福音書では、1:1を「ハジマリニ カシコイモノ ゴザル」と訳した。「カシコイ」とは、うまくことばにすることはできないが畏れ多い、人知を超えた偉大なものを示す。私たちの思いを超えた大きな大きな方が、小さな小さな赤ん坊として私たちの間に宿られたこと、そこに神の奇跡がある。

・聖書をギリシア語からケセン語（岩手県ケセン地方の方言）山浦玄嗣氏は「言」を「神の想い」と訳した。言葉は思いを伝えるもの。キリストが世にこられたことは、神の思いの表れなのである。

★説教

皆さんは、言葉をどんなときに使いますか。最近、印象に残った言葉はどんなことですか。優しい言葉？人を傷つけてしまった言葉？ほめられた言葉？しかられた言葉？

言葉ひとつで、わたしたちにはいろいろなことが伝わります。言葉ひとつでわたしたちは、喜んだり悲しんだりしますし、相手の人の考えていることがわかったりします。言葉って大切なものですね。

気持ちを伝えたいときに、わたしたちは言葉を使いますけれども、神様も、わたしたちに、特別な「言」をくださいました。今日の聖書で、「初めに言があった・・・」と読まれたのが、それです。ちょっと難しく感じましたか？もっと難しいことを教えてあげましょう。その「言」というのは、実はイエス様のことなんです。

イエス様が「言」???と、不思議に思うかもしれませんね。しかし、そうなのです。神さまがわたしたちにくださった言が、イエス様なんだよ、と今日の聖書はわたしたちに教えてくれているのです。

さっきも言ったように、言葉は気持ちを伝えます。イエス様は、神様の言として、神様の気持ちを

伝えるために、私たちのところに来てくださったのです。ゆうべ、クリスマスの夜のお話を聞きましたね。イエス様のお誕生の知らせを、いちばん最初に聞いたのは、寒い中を野原で羊の番をしていた羊飼いさんたちでした。羊飼いさんたちは、言であるイエス様を、拝みました。そして「寒さの中で野宿をしている自分たちのことも、神様は見てくださっているんだ」「神さまは、僕たちのことも救ってくださるんだ」と、イエス様をとおして神様の気持ちを受け取って、うれしい気持ちになりました。

イエス様は、神さまがわたしたちに神様の気持ちを伝えるために送ってくださった、神さまの「言」です。ですからわたしたちは、イエス様を見れば、神様のことがわかるようになっています。イエス様はこれから大きくなって、たくさんの人、特に悲しんでいる人や苦しんでいる人、困っている人たちのところに出かけて行って、神さまのメッセージをお話したり、病気を治したり、一緒に楽しくご飯を食べたり、たくさん活動をなさいます。そしてついには十字架にかかって、そのいのちまで私たちのために全部使ってくださいました。そのイエス様のお姿そのものが、イエス様を贈ってくださった神さまからわたしたちへの「わたしはあなたたちを愛しているよ」「苦しむ人、悲しむ人とわたしはいっしょにいるよ」という、メッセージです。そのイエス様の一生を見ることで、わたしたちは、神さまがわたしたち人間のことをどれほど大切に思っているか、知ることができるのです。イエス様を送ってくださった神様に感謝して、クリスマスをお祝いします。そしてわたしたちも、神さまがわたしたちにしてくださったように、周りの人を大切にしていけることができたらいいですね。